

『千代田歌集』についての研究

三原 江理子

明治時代、少なからずの歌集が出版されている。その多くが今日、とりあげられることなく、散逸している。その一つの理由が、文学作品として、今日、読むにたいしないからと考えられる。現代社会においては、1987年度に280万部を売り上げてベストセラーランキングの第一位となった俵万智『サラダ記念日』（河出書房新社、1987年5月8日初版発行、ISBN 4-309-00470-9）以後、歌集がベストセラーの上位を占めることはなく、短歌は詠むものではあっても、読むものではなくなっている。

しかし、これまで多くの歌集が出版されたことは事実であり、特に明治時代に出版されたものは、文芸的には価値のないものであっても、歴史資料として価値があると考えられるものがある。

本研究では、そうした価値を持つものとして、1893年7月に博文館より出版された佐木信綱撰『千代田歌集』に注目した。

『千代田歌集』は、CiNiiによって研究論文検索をする限りでは、先行研究は一つもないが、先行研究がないから、研究する価値がないということではあるまい。編者の佐木信綱は、当時を代表する歌人であり、今日、「佐木信綱研究会」が存在する。博文館は、当時の代表的な出版社である。編者、出版社から推して、『千代田歌集』はそれなりに評価にたいする歌集であると考えられる。収録された短歌は、現代的な価値観からすれば評価が低いもののため、研究がなされなかったと考えられるが、偏向の見られる内容ではないため、明治文化を知るためには価値のあるものと考えられる。

そこで本研究は、綿抜研究室に所蔵される『千代田歌集』がどのようなものであるかを分析し、その特徴を明らかにすることを目的とした。

調査、分析をしたところ、もっとも特徴的なところは「詠史」と考えられる。「詠史」にとりあげられる人物を調査したところ、大半が菊池容斎『前賢故実』に見られる人物であることがわかった。『前賢故実』は、江戸時代後期から明治時代に刊行された伝記集である。上代から南北朝時代までの皇族、忠臣、烈婦など585人を取りあげている。明治中期頃から国家意識の高まりにつれて、参考にされたものといわれている。『千代田歌集』の「詠史」もその影響を受けた可能性が高いことがわかった。

今後の課題は、地域を限定し、その地域の観光資源となりうる歴史上の人物を選択し、『前賢故実』掲載の挿絵と現代語訳などを付した「詠史」の短歌をあわせて、デジタル公開する方法を開発することである。

(指導教員 綿抜 豊昭)